

名勝名古屋城二之丸庭園の発掘調査

二之丸庭園は初代尾張藩主徳川義直の時代に造営が開始されました。義直期の庭園は儒教の影響を受けた中国風の庭園で、その姿は『中御座之間北御庭惣絵』（名古屋市蓬左文庫蔵）に描かれています。その後、10代藩主斉朝により、庭園は大きく改変されました。庭園範囲を東部へ拡大し、築山や園路、茶席が造られるなど回遊式の大庭園となったのです。斉朝による庭園は『御城御庭絵図』（名古屋市蓬左文庫蔵）に描かれているような姿だったと考えられています。

明治になると二之丸は陸軍省所管となりました。二之丸御殿や茶席が取り払われ、兵舎が建設されました。二之丸御殿の跡地には将校集会所が建設され、その南側には新たに庭園が造られました。江戸期の二之丸庭園は現在の北園池や榮螺山がある北御庭の一部を残してその姿を失ってしまったのです。残された庭園は現存する城郭庭園として貴重であると評価され、昭和28年（1953）に名勝指定を受けました。

平成25年度（2013）からは庭園の保存整備事業を実施しています。これに伴い、江戸期の庭園がどのような姿だったのか明らかにしていくため、発掘調査や絵図等文献資料の調査を継続的に行っています。これらの調査成果により、平成30年（2018）には名勝の追加指定を受け、指定範囲は庭園全域に拡大されました。

発掘調査は令和3年度で第9次となりました。江戸期の庭園遺構は、陸軍による兵舎建設などによる造成で破壊されている箇所も多いですが、破壊を免れた良好な遺構も見つかっています。

発掘調査では、主として『御城御庭絵図』に描かれた斉朝時代の庭園遺構を明らかにしようとしています。

『御城御庭絵図』は絵画的な表現がなされており、距離感などは実際の遺構と合致していない点もありま

すが、大まかな建物配置や個別の描写は遺構と概ね整合していることが分かってきました。また、絵図には描かれていない細やかな意匠が確認されたのも発掘調査ならではの成果と言えます。例えば、茶席の1つである「多春園」跡ではベンガラで赤く化粧した三和土を確認しました。

今後も引き続き発掘調査を行い、江戸期の名古屋城二之丸庭園の様相を明らかにしていきます。かつて藩主の庭として隆盛を誇った二之丸庭園を市民の皆様にも鑑賞していただけるよう整備するとともに、調査成果の発信にも積極的に取り組んでいきたいと思ひます。（学芸員 花木ゆき乃）



▲発掘調査の様子(令和3年度(2021)調査)



▲発掘調査で明らかになった建物跡の意匠(茶席「多春園」跡)(平成27年度(2015)調査)

名古屋城 調査研究センターだより

西の丸御蔵城宝館オープン

令和3年11月1日に新たな城内施設として西の丸御蔵城宝館がオープンいたしました。江戸時代の名古屋城西の丸には年貢米などを収納する御米蔵が6棟置かれており、西の丸御蔵城宝館はかつての三番蔵と四番蔵の外観を復元した鉄筋コンクリート、一部鉄骨造の平屋建て建築です。南側の三番蔵内部は、名古屋城の歴史を常設展示で紹介する歴史情報ルームと、オリジナルグッズを販売するミュージアムショップ、北側の四番蔵内部は重要文化財・名古屋城旧本丸御殿障壁画をはじめ、戦災焼失前の名古屋城の姿を克明に実測した「昭和実測図」や、「旧名古屋城写真原版」など、名古屋城所蔵の貴重な文化財を保管する収蔵庫が設けられています。

「御蔵城宝館」という名前には、城の宝である文化財を保管する「御蔵」と「城宝」を保存して後世に伝え、名古屋城に関するさまざまな「情報」を発信する施設という意味が込められており、三番蔵と四番蔵間の展示室では、所蔵する文化財をテーマごとに順次公開する企画展を年に複数回実

施します。現在、西の丸御蔵城宝館の周囲は整備途中ですが、今後の調査で他の御蔵跡の場所を特定します。また、三番蔵の南西部にある国指定天然記念物のカヤの木も、背後から近づいて見られるようにします。このカヤの木は、樹齢600年といわれ、名古屋城築城以前からの古木で、江戸時代中期頃まではこのカヤの実が尾張藩主の食膳に出されていました。空襲により被害を受けましたが樹勢を回復し、毎年夏には多くの実を付けます。幹の背面には真っ黒に焼けた跡が残されており、空襲による火災のすさまじさを物語っています。かつての西の丸は、御蔵と高堀によって囲まれ、南側の東西方向に設けられた一番蔵と二番蔵の間の御門から出入りする構造になっていました。そのため、囲われた空間を意味する「構」と称されており、今後の復元整備計画では、他の蔵跡を平面表示で示し、往時の空間を再現します。西の丸御蔵城宝館の企画とともに、名古屋城の今後の整備にご期待ください。（主査 原史彦）



西の丸御蔵城宝館のロゴマークと外観(南東から)

名古屋城の銅鯨

西の丸御蔵城宝館プレオープン特別企画「鯨しゃち展」

令和3年4月16日(金)から5月9日(日)まで、西の丸御蔵城宝館において、プレオープン特別企画として「鯨展」を開催しました。ほぼ同時期、昭和天守閣の復元金鯨が地上に降ろされ名古屋城二之丸広場や栄のミツコシマエヒロバスで展覧されたことにあわせ、金鯨にまつわる資料や名古屋城に今ある銅鯨を見ていただくという企画でした。会期は短くポスター類も作らない変則的な展覧会でしたが、お披露目する場所があまりなかった銅鯨を一堂に会する珍しい機会になりました。



「鯨しゃち展」陳列の様子

名古屋城の銅鯨とは

名古屋城の銅鯨は、築城期から名古屋城にあったものではなく、明治43年(1910)に江戸城から移されたものです。当時名古屋城は武家の城ではなく、名古屋離宮という天皇の宮殿として宮内省が管理していました。同じく宮内省が管理していた宮城すなわち旧江戸城の銅鯨が、この年蒸気機関車で名古屋に運ばれました。それらは、金板貼りの鱗を木芯にかぶせたいわゆる金鯨ではなく、青銅を鋳型に流して作った鋳物であり、西北隅櫓や表一之門などの名古屋離宮の櫓や門に掲げられました。

昭和20年(1945)の空襲により天守の金鯨は天守とともに焼失しましたが、西北隅櫓など3棟の櫓は類焼せず現存しており、青銅製の旧江戸城鯨も上に載っています。全焼した東北隅櫓などの鯨の一部は、鋳物であったゆえ炎上せず燃え残りました。それらをこの鯨展で展示したのです。

写真の銅鯨は、痛ましく損傷し頭部しか残っていませんが、眼光鋭く、ひととき優れた作行を示しています。明暦大火の後の明暦3年(1657)10月、渡辺銅意という幕府お抱えの鋳物師が制作したという銘があり、江戸城の蓮池御門に掲げられ、明治43年名古屋離宮の正門として蓮池御門とともに移築されたことが、古写真や宮内庁に所蔵される記録類から明らかになりました。

この他、燃え盛る櫓から落ちた衝撃で真二つに割れた銅鯨、口の奥に炭化した木材が残る銅鯨も展示しました。来館者の反響は大きく、多くの方が、江戸城から名古屋城にもたらされ空襲を生き延びた銅鯨に驚き、そして見入ってくださいました。(学芸員 朝日美砂子)



名古屋城正門銅鯨 明暦3年(1657)作 (名古屋城総合事務所蔵)

五条橋の擬宝珠はいくつあったのか？

五条橋擬宝珠

先に閉幕した特別展「名古屋城誕生！」(令和3年11月1日~12月19日)に、「五条橋擬宝珠」を出品しました(図1)。五条橋は名古屋の堀川にかかる橋であり、「擬宝珠」とは欄干の柱の頭部に据える装飾のことです。

この擬宝珠には「五条橋」「慶長七年壬子」「六月吉日」の銘が刻まれています。名古屋築城とともに堀川が開削されたのは慶長15年(1610)以降なのに、なぜ慶長7年の銘があるのでしょうか？実はこの擬宝珠はもともと清須城の近くを流れる五条川に架かる五条橋に据えられていたのですが、堀川開削にともなって名古屋に移されたのです。



図1 五条橋擬宝珠 (名古屋城総合事務所蔵)

素朴な疑問

現在、名古屋城には五条橋擬宝珠が6基伝わっています。これらは昭和13年(1938)に五条橋が現在の橋に架け換えられた際に取り外されたことがわかっています。これらはすべて、もとは清須の五条橋に据えられていたと考えられてきましたが、6基のうち銘が刻まれているのは4基だけで、よく見ると銘のある4基と銘のない2基では若干形も異なります(写真は銘のある擬宝珠)。いかにも不自然です。

擬宝珠はいくつあったのか

そこで江戸時代後期に尾張藩士の高力種信(猿猴庵)が著した『尾張名陽図会』にある五条橋の挿絵をみると、なんと擬宝珠は橋の両端に2基ずつ、計4基しか描かれていません(図2)。残りの2基はいつ据えられたのでしょうか？

大正5年(1916)に刊行された『名古屋市史 地理編』には、五条橋が明治34年(1901)に架け換えられたとあります。さらに調べると、昭和の初め、五条橋が今の橋に架け換えられる直前、『愛知県史』編纂のために県が橋を調査した際のメモが、県の公文書館に残されていました(図3)。

これをみると、橋の中央にも擬宝珠が据えられ、擬宝珠は計6基に増えています。そして銘は「六本ノ内四本ニアリ、中央ノモノハ記サス」とあります。この中央の擬宝珠2基が、現在名古屋城に伝わる銘のない擬宝珠2基に当たることは間違いありません。おそらく銘のない2基は明治34年の架け換えにともなって増設されたのではないのでしょうか。

今後の課題

まだ問題は残るものの、これまで五条橋擬宝珠の来歴の一部が誤って伝えられてきた可能性の高いことがわかってきました。今後は明治時代の五条橋に関する史料を探り、先に記した推測が妥当であるか、さらに検証を進めたいと思います。(学芸員 木村慎平)

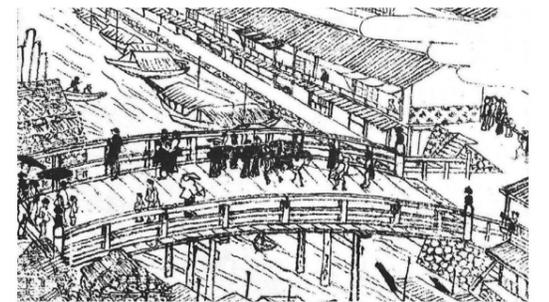


図2 江戸後期の五条橋 『尾張名所図会』より (愛知県郷土資料刊行会、1971年)

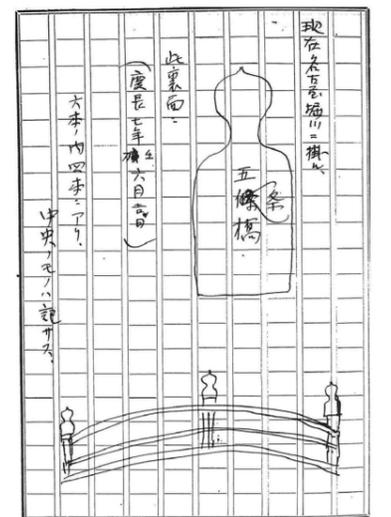


図3 五条橋図・銘 (愛知県公文書館蔵)